

都道府県別賞一等

生命保険に込められた祖父の最後の一球

青森県 八戸市立鮫中学校 二年生

神子澤 天惺

僕が生命保険の大切さを実感したのは、中学一年生のときでした。その年、僕の祖父が膵臓ガンで亡くなりました。大切な人を失う悲しみとともに、生命保険というものの意味を初めて深く考えるきっかけになったできごとでした。

祖父は明るくて優しい人で、僕にとって大切な遊び相手でした。特に、近くの公園で毎週のように一緒にキャッチボールをする時間が楽しみで、祖父はいつも「グローブはちゃんとはめるよ。」

「構えが甘い。」

と笑いながらアドバイスをしてくれました。僕がミスをするときと笑って励ましてくれて、その時間は僕の宝物でした。

しかし、病気は急速に進み、祖父は次第に体力を奪われていきました。もう一度だけでもキャッチボールをしたいと願っていましたが、その願いは叶いませんでした。祖父が亡くなったとき、同時にこれからの生活に対する不安も大きくなっていました。

そんなとき、祖父が生前にかけていた生命保険が大きな支えとなりました。保険金は、入院や治療にかかった費用にあてられただけでなく、僕の学費や生活費をまかなうための助けにもなりました。もし祖父がこの保険に入っていなかったら、家族の生活はもっと困難だったと思います。

それまで保険のことを深く考えたことはありませんでしたが、この経験を通して、生命保険が家族の未来を守る大切な手段であることを学びました。祖父は言葉に出さなくても、僕たちのことを思い、安心できる未来を用意してくれていたのだと感じます。

今も、野球部の練習で疲れたときには、祖父と過ごしたキャッチボールの時間を思い出して、

『あのときのおじいちゃんのようにしつかり投げよう。』

と自分を励ますことがあります。祖父の愛情と優しさは、僕の心の中でずっと生き続けています。

いつか僕も大人になり、家族を持つときには、祖父のように、

「もしものとき」
に備え、大切な人たちを守ることができる人間になりたいと思います。祖父の死と生命保険の経験は、僕にとってかけがえのない教えとなりました。

第63回中学生作文コンクール

祖父が残してくれたものは、保険金だけではありません。家族を思うその強い意志と覚悟、そして未来を守るための最後のキャッチボールだったのだと思います。だから僕も、いつか誰かの支えとなれるように、責任を持っていきたいです。これが僕の、祖父からの大切なバトンです。